

岩屋保育園

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします

第11回は京都市山科の岩屋保育園。岩屋神社の中にあり緑の柱に守られながら、子どもたちも保育者も生き生きと過ごす保育園を訪ねました。

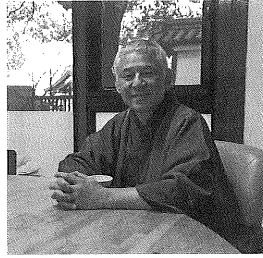


京都駅で地元の鍋島先生と合流。電車を乗り換えて山科駅に到着。静かな街並みの中に岩屋神社があった。階段の下から見上げれば、咲きそろうた桜が神社を彩っている。静けさの中に懐かしさと美しさが広がる。

子どもを連れなお母さんたちについて行くと、岩屋保育園にたどり着いた。門を入ると、和服姿の室田一樹園長先生が笑顔で出迎えてくださった。「父から譲り受けた着物がたくさんあり、できるだけ着ようと思っっているんですよ」と穏やかに話される言葉を聞きながら、今日という日への期待がぐんぐん高まっていった。

岩屋保育園は昭和二十五年に開園。「ここの保育をぜひ受けさせたくて」という熱い思いで入園希望者が集まってくるという。親子二代で岩屋保育園に通っているという人もいるとのことだった。

◆大きな丸い机を囲んでの語り合いから始まる



こちらへ、と案内された場所には大きな円卓があった。周りにはたくさんさんの書物。まるで研究室のようだ。「ここ、いいでしょう」と笑顔の室田先生。テーブルの中央には話

し合いに必要な文房具が入っているカップや録音機が置いてあり、フル活用されている場所だということとがわかる。室田先生は静かに語り始めた。保育園についての語りはそのまま室田先生自身についての語りへ、そして大切な二人の方との出会いについての語りへとつながっていった。

その一人が画家の藤田欽平先生。昭和五十五年ごろ、既存の保育研修会に物足りなさを感じていた時に藤田先生に出会い、「学びたい！ 学ぼう！」と決意。断られても粘り強く交渉し、ついに職員と絵を描く研修会を実現。その後長い間、藤田先生とのか

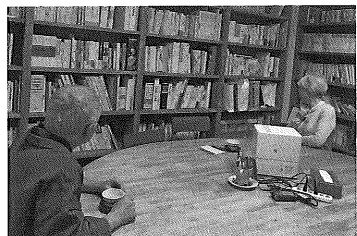
かわりを重ね、多くの学びを得たという。

「芸術を愛している人に子どもものそばにいてほしい」「子どもものそばにいる大人がどのくらい豊かなものを見たり聞いたりしているかが大切」という言葉が心に残っている。

もう一人は鯨岡峻先生。六年間、先生の研究室に通い学びを深め、「エピソード自体に問いを立て、そこにコメントを書く」ということを丹念に重ねたという。その成果を『保育の場に子どもが自分を開くとき』（ミネルヴァ書房）にまとめられたのは最近のこと。保育者一人ひとりのまなざしや息づかいが感じられる内容で、それはこの大きな丸いテーブルを囲みながら生まれ、そして今も生まれ続けているのだろう。

◆アトが息づく空間が随所に

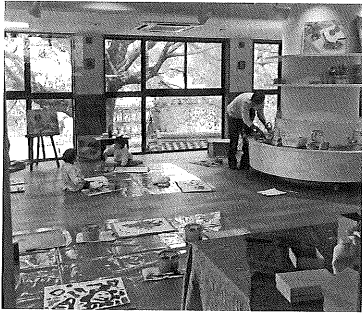
話は尽きないけれど子どもたちの場所をぜひ見



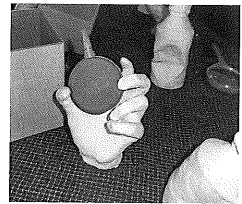


風景。階段の壁には子どもたちが描いた絵が美しく飾られ、踊り場には印象的な絵画が飾られている。階段の手すりは赤く彩られ、壁や階段の白の世界にアクセントをつけている。そこに座っている子ども達の服の色まで絶妙に絡み合い、環境全体がアートになっている感じがした。

園内にはアトリエという部屋があり、この日も数人の子どもがゆっくり



たい！と
一歩踏み出
すと、随所
にアートが
あることに
気付かされ
る。上の写
真は階段の



の一つ。ここでは子どもも大人も夢中になって暮らしている、そんな息づかいが感じられる。

◆鎮守の杜で シイの木の話

保育園を出て鎮守の杜に向かう。雑木林のような所を進むと、少し開けた所に、ツブラジイの大木があった。岩屋保育園では特別に大切にしている樹だという。

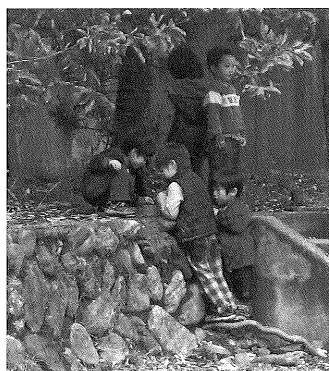
秋にはポタポタと実が落ちる。その実



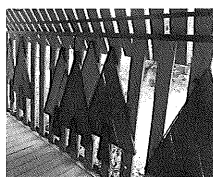
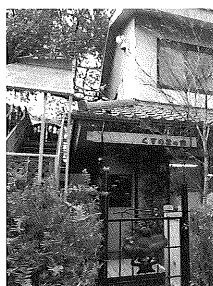
絵を描いていた。アトリエの壁際にあるイーゼルには描きかけのデッサンや水彩画が置かれている。机の上にはいろいろなオブジェが飾られていた。上の写真はその中

を、水を張ったバケツに入れ、水の中に沈んだ実をプランターで育てる。このようにして年中組の秋に育て始めたシイノミは、やがて芽を出し育っていく。そして卒園式はツブラジイの樹の下で行うのだという。卒園する子どもたちと保護者だけが参加する卒園式。ツブラジイの苗が、卒園する子どもたちに手渡されていく。伸びていく喜びや大木へのあこがれを胸に、一步一步歩みを進め育っていくことの大切さや、命のかけがえのなさを感じ取る、とびきりの卒園式なのだろうと思った。

その先に広場があつて子どもたちが遊んでいた。あちこちで額を突き合わせ、身を寄せ合っている。



◆リビングのような部屋で食事をする一歳児



○歳一

歳児の保育室は別棟にある。そこからへと向かう通路にはすてきな樹の飾りがあつて心惹かれた。

室内にはリビングにあるようなテーブルと椅子があり、隅に置かれているソファも家庭的な感じを醸し出している。窓からは緑が見えて、別荘に來ているような感じもする。

穏やかな表情でご飯を食べさせている方に「おいしそうですね」と声を掛けたら、「うちの子は昨



日入園したばかりなので、ご飯を食べさせに来てくれるんですよ」という思いがけない返事が返ってきた。保育者だと思っただけ話しかけた方は保護者だったのだ。保護者が保育の中に加わっている感じがとても自然で、親も子も安心して岩屋保育園での暮らしを始められているように感じた。

◆子どもたちの暮らしが見える おいしい時間

「今日は焼きそばだよ」という情報がおいしい匂いと一緒に伝わってきた。どうやら焼きそばは人気メニューのようだ。遊び終えた子どもたちが保育室に集まってきた。

窓辺には座卓が幾つも並べられていて、ここで食べよう、と思っただ子どもたちが自分で



▲取り分けるのは自分たちの手で

場所を決めて座っていく。

大皿に盛りつけられた焼きそばやおかずは、子どもたちの手で銘々の皿に取り分けられていく。そのような生活が積み重ねられているのだろう。たくさんの子どもが集まっているのに、落ち着いた雰囲気は漂っている。取り分けた皿を差し出す手と受け取る手、柔らかなしぐさの重なりは、まるで家族のようだった。

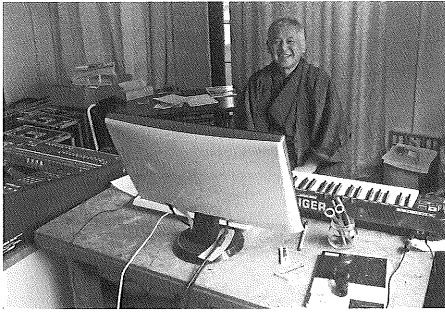
あいさつをして食べ始めた子どもたち。同時に中央のテーブルに大量の焼きそばやおかずが並んだ。おかわりテーブルだ。食べ終わった子どもたちが、次々におかわりにやって来る。どれにしようかなと迷ったり、どのくらいよそおうかなと考えたり、子どもたちの目は真剣そのもの。たくさん食べて、たくさん遊んで、子どもたちの時間は確実に積み重なっている。



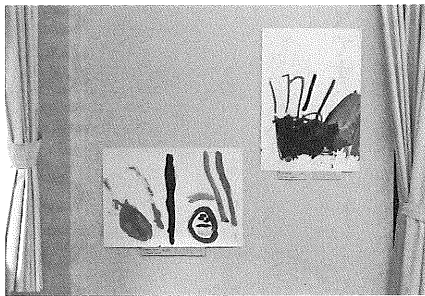
▲おかわりタイム 何回でもOK!

◆歌が生まれる・歌を楽しむ生活

大学時代はジャズが趣味だったという室田先生。保育園の先生が結婚される時には、お祝いにその人のイメージで歌を作ってプレゼントするのだという。歌作りのコツが知りたくて質問してみたら、「歌を作るっていうことは、考え続けること。その人のことをずっと考え続けていると、ある時、パツとおひてくる」という答えが返ってきた。



保育園の先生たちも画家の藤田先生も作詞し、そこに室田先生が曲をつけ歌にしていく。子どもたちの愛唱歌となり、CDに録音していくそうだ。園内にはスタジオがあつて、たくさんの楽器や機材がそろっている。作曲している時の雰囲気でお願ひします！とリクエストしたら、今日一番の笑顔が返ってきた。



目の前の子どもについて語ることで保育の中で大切にしていることを確かめ合い、岩屋保育園では保育課程が作られている。77ページにもわたる重厚な保育課程はホームページで閲覧できる。岩屋保育園の穏やかな時間の流れや室田先生の笑顔を思い出しながら、保育課程をじっくり読んでみようと思う。訪問者／鍋島恵美（京都教育大学附属幼稚園前副園長）

宮里 暁美

文／宮里暁美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

— 訪問メモ —

訪問時期：2013年4月
訪問場所：社会福祉法人岩屋保育園
〔住所〕 京都府京都市山科区
大宅中小路町 65 - 8
〔電話〕 075-571-5790